

長崎「生と死」を考える市民のためのネットワーク、20年99回の歩みを振り返って

永田 耕司 (活水女子大学)

Keyword: 生と死、市民のためのネットワーク、自主学習会

【問題・目的・背景】

1997年のメメントモリ講演会(死を想え)が長崎市で開催された。シンポジストとして、アルフォンス・デーケン氏、日野原重明氏、遠藤周作の奥様が出席して、2000人を超える市民の参加があった。これをきっかけに、生と死について考える機会が1回で終わるのでなく、市民学習会として継続していこうという趣旨で長崎「生と死を考える」市民ネットワークが始まった。それ以来、現在まで20年にわたり、99回の回数を重ねてきた。今回はその内容と会の参加者の感想から、生と死の考え方やターミナルケアへの参加者の意識がどう変わってきたかの分析を行った。

【研究方法・研究内容】 ・会の案内・・・医療スタッフにはファックスまたはメール送信を行った。一般市民の方には新聞や広報誌を通して案内を行った。 ・場所は医学部ポンペ会館や良順会館で開催し、開催日時は金曜日の7時から1時間程度の講話、その後意見交換を行う形をとった。当初は2か月に1回程度開催していた。 ・会費は当初は100円、途中から300円を徴取した。 ・参加者は多い時で30-40名、少ない時で10名程度であった。聴講後、参加者の意見交換内容や感想を書いてもらった。

【研究・調査・分析結果】

1) 講話の内容

①医療スタッフからの講話(5割 医師や看護師)・・・ターミナルケア、ホスピススタッフ、麻酔科医の疼痛緩和、在宅ケア「在宅での死の看取り」、スタッフ自身の病気、「末期がん患者さんを自宅で看取る」在宅ターミナルケア医師

②患者や家族(3割)例 「親を看取って、また自分がガンになって思うこと」、「夫の看取りと私の立ち直り」、「病院で迎えた父親の死」本人や家族が望むお別れのあり方について考える、Yさん、「アメリカで出会ったガンとともに生きた人たち」、「小児がんのわが子を看取って」ペンギンの会」実行委員Nさん、「「家族の看取り」から「生と死」について皆さんと考えてみましょう。」、「家族の中での自殺」、「麻弥さま 母より・メラノーマで娘(27歳)を看取って」Kさん、「命に寄り添う・・・妻の死に寄り添い、認知症の母親が教えてくれたこと」詩人・児童文学作家 藤川幸之助氏、「娘の看取りをふりかえって-精神科医との対話を

通して-」、「安心して老後を過ごし、死ねる町づくり」・・・地域の縁を結ぶ助っ人隊活動について・山口 明氏(鶴の尾町助っ人隊代表)、「かけがえのない家族との死別、そしてグリーフワーク(深い悲しみや嘆き)と向き合っ」諫早市Aさん、「娘の死、それから長期入院の子供たちとその家族の支援を通して」 「ペンギンの会」代表N氏

③その他、様々な「生と死」をみつめて、島原カトリック教会主任神父、「喜びも悲しみも共に」長崎バプテスト教会、「余命3ヶ月の宣告をされた方との交流を通して」・「いのちのゆくえ」 光源寺K僧侶、「おくりびととして旅立ちのお手伝いをして」発表 メモリードホール、「これからの葬儀について」冠婚葬祭互助会、「“幸せな医者”になるために」長崎大学 医学部3年K君、「死生学について・若者と語り合う生と死を」長崎ウェスレヤン大学・内村先生、「肝炎とともに歩んで・生と死を考える」薬害肝炎原告団、「長崎いのちの電話からのシグナル」 「長崎いのちの電話」常務理事及び事務局長、

2) 感想や質問の分析

①初期・・・告知について。ターミナルケアしてくれる医療機関や医師、よい医師の見つけ方、主治医との関わり

②中期・・・ホスピスについて、・病院では死にたくない。

③後期・・・在宅ターミナルケアへの関心増ええた。一人で在宅はケアもできるのでしょうか?・家にいると、どうしても孤立してしまってマイナス思考になるので、話をしたり、癒される場所がほしい。・在宅で看取ってくれる先生に主治医になってもらうにはどうしたらよいでしょうか?今の主治医に言いにくい。いざというときには病院に入院をさせてくれるのか?・大体どれくらいの頻度で訪問してもらえますか?・在宅で看取るのは家族にとって不安が多いのでは?・在宅で看取の場合の家族の気持ちの持ち方、また気をつけて点など知りたい。

【結論・考察】 ・会を通じて、市民向けにターミナルケアへの理解が深まった。また家族との交流が深まった。・また、ターミナルケアが在宅を含めて、浸透し当初と比較して在宅ケアの質問が多くなっていた。一方で医療機関へ不信は減ってきた。・医学生や看護学生の参加もあった。家族の支援として植樹ができた。・今後は不定期開催で行い、教育などを通して学びを深めたい。